

フランス語圏の生存主義者と宮本常一 —比較研究—

アレクサンドル・マンジャン*

「生存主義」または、「生き残り主義」とも訳される、日本ではまだほとんど紹介されていない社会運動とその生き方をご紹介したい。なお、フランス語の専門用語と対比する日本の専門用語が定まっていないため、当方の解釈による翻訳となっていることをあらかじめご了承ください。

さて、この本文では、この社会運動と代表的な人物を取り上げ、民俗学者：宮本常一とを比較してみたいと思う。

「生存主義」というテーマは、英語圏やフランス語圏の主流のジャーナリズムでは豊富に取り上げられているが、その多くはネガティブに取り上げられ、酷評されている。一方、日本では全く無名に近いものである。好みについては別の問題として、とにかく、社会現象としてでもそれについて学ぶことが、以下に述べる理由で、必要なものになるだろう。それとは反対に、日本民俗学者兼講演者である宮本常一は、海外では、数人の日本学者以外、全くと言っていいほど認知度がなく、彼の人文科学への素晴らしい貢献にもかかわらず、現在、1冊の英訳本が存在するのみである。

何よりもまず、「生存主義 (le survivalisme)」という単語を定義することが肝要である。この単語の由来はどこであろうか。また、日本語に相当するものがあるであろうか。それでは、この運動の起源を紹介することにしよう。

フランス語の単語「survivalisme」は、英語の「survivalism」を由来とし、快適さや栄光や科学といったことより遥かに重要で根本的な目的であ

る「生存すること—生き残ること」と「生きたいという意志」を重視している運動であり思想である。カート・サクソン (Kurt Saxon) というアメリカ人がその単語の提案者であることを主張している。辞書の定義によると、それはアメリカにおける運動としているが、その考え方は近年急速な展開を見せるフランス語圏の生存主義者たちの存在を無視してしまう。様々な典拠を突き合わせた結果、筆者の提案する定義は次のとおりである。

地域の災害や国家的災害等の原因が自然・人間にかかわらず、「生存主義」というものは、①「常態またはサポート組織の断絶」や「社会・文明の連続性の一時的または最終的停止」時に精神的かつ物質的に備え、②自然災害や日常生活での事件・事故といった非常時を乗り越え生存していこうという考えに基づいた倫理と生き方である。

その倫理は、多数の側面（有機農業、地域の自給自足、太陽光や風力等による発電、個人の自衛など）を含んでおり、個人・家庭・ミクロ社会（農場・村）といった規模だけでなく、地元や国内ネットワークでも国際ネットワークでも経験できるものである。とりわけ Facebook 上でヴォル・ウエスト (Vol West) によって創立された「フランス生存主義ネットワーク」は最も認められ、影響力を持っている。

しかし、日本語には「le survivalisme」に対応する単語がまだない。「サバイバル」という外来語があるが、「生存の技術」といった「le survivalisme」の一面を示しているにすぎないため、私はフランス語の直訳である単語の「生存主義」を提案する。

* お茶の水女子大学外国語教員

外来語としてカタカナで（スルヴィヴァリズム）とするより漢字で表記するほうが理解を容易にし、「サバイバル」と混同する恐れを避けることができるためである。私が知る限り「生存主義」という言葉は、医師奥山孝門¹によって作られたようであるが、以後再利用されなかったようだ。

生存主義を明確化するのには難しいが、運動はつい最近（2011 頃）、フランスで構造化した。記事の多くはエベール式体育法（l'hébertisme）について言及している。エベール式体育法とは、災害に備えて人の強化を唱えるイデオロギーである。フランスの教育学者ジョルジュ・エベール（Georges Hébert（1875-1957））が 1902 年に火山であるペレー山（la Montagne Pelée, マルティニーク島）の噴火を目撃したことにより、これを構想した。

そして、アメリカの建築家ドン・スティーヴンス（Don Stephens）は 1960 年代に *retreater*（撤退主義者）の概念、シェルターやサバイバルキットを考案した人物である。さらに、アメリカの自由意志論者（libertarians）は、簡略化した国家組織を唱え、国民は自ら地域規模の組織を持たなければならないと言い、生存主義者たちに影響を与えている。自衛民兵を成すためにアメリカ合衆国の憲法によって保護されている武器を持つ権利は、多くのアメリカ人の武器に対する抵抗感を和らげ、自由意志論者の興味を惹きつけてきた。最後に、アメリカの生存主義の発端である「preppers（準備主義者たち）」は、ソ連との核兵器による戦争が恐れられていた冷戦中に発生した。彼らは、大災害を予想し核シェルターで武器や食べ物を貯蔵していた。

1973 年に、ハワード・ラッフ（Howard Ruff²）は、経済崩壊を予想し、通貨に比べて金の価値を再評価し、金の貯蔵を提唱している。その時より、徐々に本格的な生存主義の本は出版されはじめる。例えば、先ほど言及した「survivalist」の単語の考案者であるカート・サクソンは、19 世紀の先駆者たちの生き方に関する本を出版している。

もう一つの例：メル・タッパン（Mel Tappan）は、1970 年後半よりニュースレターとして「個人の生存の手紙（*personal survival letter*）」を著し、ジョン・パグズレー（John Pugsley）は、ベストセラーとなる「アルファ戦略（*The Alpha Strategy*）」を出版する。そのエッセーは、いまなおアメリカ人の生存主義者たちの間では、リファレンスとして見なされている。

ブルース・クレイトン（Bruce Clayton）の著作「世界の終末後の生活（*Life After Doomsday*）」は、軍備拡張競争の時代である 1980 年に出版された。1990 年代末の「2000 年問題」は、生存主義の思潮に新たな活力を与えた。2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件とこれを引き金とした「対テロ戦争」は、1960・70 年代の冷戦時代に遡るほどの強さで、差し迫る大災害に対する恐怖を掻き立てた。2004 年のスマトラ島沖地震及び 2007・2009 年におけるアメリカ合衆国の財政の危機はその現象を増大した³と言える。

しかし筆者は、生存主義者たちは先駆者を見つめるため、より過去に遡る必要があると考えている。今日まで存続している社会（伝統的な社会のアマゾンの先住民、アフリカのある部族、現代社会の中国、イラン、スコットランド、アイスランド等）は、「生存主義の社会、生存主義の国」⁴と言っても良いが、その傾向の別の起源を、フランソワ・ケネー（François Quesnay（1694-1774））の業績でも見つけることができる。ケネーが提唱した「重農主義（*physiocratie*）」という経済学の学派によると、富はすべて自然（したがって農業）によって創造されたものであるから、サービス（第二次・第三次）作業部門と投機は本質的に不毛のものなので、制限すべきとしている。有機物をリサイクルすることで、無限に富を再創造するのは自然のみの営みである。それは、自給主義的で農業を優先する生存主義の基盤であり、パーマカルチャーを強く勧めるものである。パーマカルチャーとは「エコロジカルデザインや環境デザイン分

野の用語であり、自然のエコシステムを参考にして、持続可能なアーキテクチャや自己維持型の園芸システムを取り入れようとする概念」である。後に、クロード・ドゥ・サン＝シモン (Claude de Saint-Simon (1760-1825)) やシャルル・フーリエ (Charles Fourier (1772-1837)) のような空想的社会主義者たち (socialistes utopiques) は、誕生地の偶然ではなく、共同の価値観を持ち、とりわけ自給・自足を目指して生活を共にする決意に基づいたコミュニティーを考えた。

今日、生存主義の著者たちは、英語圏の人もフランス語圏の人も数多くおり、生存主義を主張する人はフランスをはじめとするヨーロッパ諸国のほか、世界中で次第に多くなりつつある。生存主義の復活の起点 (新生存主義といえるであろう) は、ピエロ・サン＝ジオールジオ (Piero San Giorgio) の著書「経済崩壊に生存する (*Survivre à l'effondrement économique*⁵⁾)」が出版された 2011 年に位置づけることができる。その本は田舎における生存について論じるエッセーである。その本と運動を紹介するために、サン＝ジオールジオは講演会⁶⁾を重ね、名声を得はじめた。同時に、フランス人の生存主義者で有名なプロガーであるヴォル・ウエスト (Vol West) は、この生き方について理論づけ、YouTube に掲載するビデオにより、関心も嫉妬も爆発させている。その後、ピエロ・サン＝ジオールジオとの出会いもあり、結果として共著で、都市における生存に関するハンドブック「野蛮な通り：都市で生存すること (*Rues barbares – Survivre en ville*⁷⁾)」を出版するに至った。

なお、本文は 2 つの部分で構成されている。まず、代表的な人物とその思想 (1)、そして宮本常一のアプローチとの比較 (2) を紹介する。

1. 代表的な人物の紹介

最初に日本人の民俗学者を年代順に紹介する。

A) 宮本常一

教養ある百姓一族出身の宮本常一は、1907 年に山口県周防大島で生まれた。宮本家は、伝統的な生活 (衣食住) を送り、「善根宿」として旅人をもてなしていた⁸⁾。宮本は、将来の研究範囲のただ中に育ったと言える。後年、宮本は伝統的な村、その習慣 (例えばその会議、寄り合い⁹⁾、助け合い、相互贈与、一般的に自給自足に近い小規模共同体での相互扶助など) について書いた。

大阪通信学校に進んだのち、大阪府立天王寺師範学校を卒業する。その後、小学校の教師として勤務した。生徒たちを連れ、近隣の田舎にフィールドワークをさせ、今日では考えられないほどレベルの高い民俗雑誌を書かせた。その頃に 2 人の師匠に出会う。日本民俗学の先駆者の柳田國男 (1875-1962) と日本銀行総裁であり漁村に興味を持つ民俗学者である澁澤敬三 (1896-1963) である。柳田からは、学識豊かな教育を、澁澤からは実用的な教えと、澁澤が創立したアチック・ミュージアム (屋根裏博物館) での研究者のポストを与えられた。

澁澤は、宮本をフィールド調査に派遣した。宮本は調査旅行の移動は、一部で電車等を用いたが、大部分は徒歩で行っており、日本全国を歩き回った。家に帰ると、本や小論文を著した。その内容はとても描写的であるが、多くはあまり理論的ではない。著書は 200 冊を超えている。『宮本常一著作集』は 1960 年代後半より刊行され現在も続刊中で、その半分しか出ていないようである。その他、(山口県民のために大学教員や農業経営者の講演会を組織する郷土大学を含めて) 多くの研究会の創立に貢献し、全国で講演を重ねた。その講演会は主に 2 種類ある：田舎の民俗 (伝統・習慣) の紹介と、地元の中小企業への企画提案であった。晩年には、海外を旅する。済州島 (제주도[チェジュド])、台湾、中国、ケニア、タンザニアへ行った。これによ

り、宮本の講演会の内容はより人類学的色彩を帯び、考古学者や考古人類学者の業績を紹介し、それに基づいて「日本文化の形成」に関する人類学的な仮説を述べるようになる。51歳で博士号を取得し、武蔵野美術大学での助教授として、そして早稲田大学で教授として教鞭をとり、彼の様々な研究テーマの中連綿とつながる全体的な理論 (théorie générale) を本に著す途上に亡くなった。存命中は、中世からあまり変化のなかった農民の生活から、飛行機・映画・テレビ・最初のコンピューターまで、技術の加速度的な進展の時代 (昭和時代) を経験した。

B) フランス語圏の生存主義者たち

① ピエロ・サン＝ジョールジオ

1971年生まれのピエロ・サン＝ジョールジオ (Piero San Giorgio) は、ジュネーヴの ESM (Ecole de Management et de Communication) でマーケティングを学び、発展途上国の市場 (marchés émergents) を専門とする情報科学会社のマーケティングマネージャーとして働き、(Andiamo として Salesforce という会社の) 社長として活躍した。その経験により、とりわけ極貧の国民 (特にジンバブエで) 生活状況の詳細な知識を得、その生を観察する。そして、経済・天然資源、地政学を独学することで、意識化をするようになり、自ら創立した会社を辞め、従来の生活の仕方を捨て、生存主義のつましい暮らし方を選び、田舎に引っ越しする。そこで、「経済崩壊に生存する (Survivre à l'effondrement économique)」を書きあげる。

この本は、マスコミに無視されたにも関わらず、ベストセラーになる。本の紹介のため、サン＝ジョールジオは講演会を精力的に行う。自己マーケティングに長けているので、サン＝ジョールジオは生存主義に陽気な表情を与え、マスコミが伝えるステレオタイプのイメージよりニュアンス豊かなイメージを見せている。

ピエロ・サン＝ジョールジオの本は、おそらく 21 世紀始めの最も重要な著作になるだろう。英語・ロシア語・イタリア語・スペイン語に翻訳され、もうすぐギリシャ語に翻訳されるとのことであるが、日本語には、まだ翻訳されていない。その表紙には、「実用的なハンドブック (Manuel pratique)」と書いてある。この本は、あるパートでは、本当にその言葉のとおりである。経済崩壊が引き起こす問題の確認・分析・解決の提案をもたらすエッセーであり、自分の頭で考えるように強く勧めるものである。

常態の断絶 (本では経済崩壊) の場合、サン＝ジョールジオは生命そして社会の生存を保証するポイントを紹介している。それは、水、食物、衛生と健康、エネルギー、知識、自衛、社会の絆の 7 つである。まずは、生理的に必要な最初の 2 つのポイントである。これなしでは、命を保存できない。衛生と健康は次に来る。食べ物を生産する技術、治療する技術、読み書きの技術、文明を伝承する技術などは、知識がないと伝えられない。また、エネルギーがないと、快適さと機械化は非常に限られていく。快適さの必要性と言える。そして、公権力が無くなる、または、少なくともすぐに介入できなくなる恐れがある世界でおろそかにしてはいけないことは、自衛である。略奪者や野獣などの攻撃があった場合、自衛により (命を含めて) 全てを失わないようにさせるのである。最後に、社会的な絆により、能力・技術の補完性ができる：例えば、農業者や医師、教師、職人・技術者たちなどで構成できると最高である。バランスが本当に取れて、郷土に深く根を下ろし、相互に扶助・依存している人々で形成された社会を求めている。

その 7 つのポイントは、「持続可能な自給自足基地 (Bases Autonomes Durables (BAD))」¹⁰内に存在しなければいけない。しかし、威信ある生存主義の思想家はピエロ・サン＝ジョールジ

オ一人だけではない。

② ヴォル・ウエスト

モンタナ州に住んでいるフランス人のヴォル・ウエスト (Vol West) は、「la résilience (日本語にない概念である：衝撃強さ、弾性エネルギーと翻訳されているが、「外傷性ショックや逆境に耐えることによって生きて発達する能力」といえる)」、家族、自給自足、自衛 (武器を持った積極的な防衛と建築物や茂みなどに身を隠すなどの消極的防衛) を強調している。

ウエストは、「常態の断絶」を体系化し、地理学的な範囲によりその確立を考えた。それは個人レベルのできごと (例えば交通事故、強盗など)、地域レベル (洪水、都会の暴動など)、全国レベルのできごと (食物不足、通商禁止、津波など)、国際的レベルでのできごと (戦争、石油の枯渇など) である。

ウエストにとっては、生存主義的といえるものは、あらゆる手段を使うことによって生存しようとする各 *résiliente* な (問題を越えられる) 社会なのである。

③ その他の人物

a. 他の生存主義者たち

« bushman » という派閥の代表的な人物である在仏カナダ人、ダヴィド・マニズ (David Manise) は、「サバイバル技術の研究教育センター (Centre d'Etude et d'Enseignement des Techniques de Survie (CEETS))」の創立者として、自然 (主に森) の中でサバイバルの研修を行っている。一種の極端なボーイスカウト運動ともいえるその生存主義活動は、たとえメディアによって歪められていても、比較的露出も多く、認知度があると言える。このような研修を組織する唯一の人間ではないが、マニズは最も有名であり、「フランス語圏の生存主義」の代表者でもある。

Facebook 上で展開している、ヴォル・ウエス

トの提案で創立された「国際生存主義ネットワーク (le Réseau Survivaliste Francophone mère : フランス語圏生存主義ネットワーク本部、略 RSF-mère を含めて)」は、意外な人気を博し、県ごとのネットワークも自発的に構成されるようになった。現在では、各県・海外県・スイスの州・国外移住者たちの様々なコミュニティー・各フランス語圏の小さい領土さえ各々の生存主義ネットワークを持ち、緊急の場合 (例えば大地震など)、メッシュ型トポロジーと効率的な相互扶助を可能にする。そこでの交流は暖かく、アドバイスは豊富に共有されている。

b. 生存主義に近いが生存主義者ではない人物

様々なエコロジスト運動があるが、大抵の場合、生存主義のすべての側面 (つまりサン＝ジョールジオの7つのポイント) は取り扱われていない。例えば、ピエル・ラビ (Pierre Rabhi) と運動コリブリ (le Mouvement Colibris (ハチドリ)) という団体は、現在、おそらく宮本のビジョンに一番近い人物であろう。ココペリ協会 (L'association Kokopelli) という団体は、「種子と腐植の解放」のために、圧力団体ともなる農業化学・農工業の大企業であるモンサント (Monsanto) 社に操られている欧州連合の法律と積極的に戦っている。欧州連合は、農業経営者たちに自家採種や自家採種した種子を使用することを禁止したばかりでなく、モンサント社の種子を取ることができない一代雑種 (ハイブリッド種 : F1 種) の種子の買入を強いており、同社もまたすべての穀物の種の特許を取ろうとしているのは知るべきポイントである。

2. その2つのアプローチの比較

時間と空間との隔たりがあるにもかかわらず、生存主義者のアプローチと宮本常一のアプローチ

に類似点があることを表すこの本文の正当性を以下に述べたいと思う。

A) 類似点

たとえそのフランス語の単語を知らなくとも、「問題を超えられる能力 (*la résilience*)」という言葉は、宮本常一が取り扱ったテーマである。例えば、建築（荒れ狂う風雨に耐えうる建物、建て方と再建）、経済（頼母子（たのもし）講）、社会（相互の手助け、相互贈与、危機の緊急寄り合い）などにおいて。

さらに、講演者として、宮本は郷土大学などで、農業経営者たちの教育に腐心し、変化への適応術を教えた。

ピエロ・サン＝ジョールジオの7つのポイントのリストを再見すると、宮本は以下のポイントを取り扱ったと言えるであろう。

- ① 水については、建築研究（例えば井戸や灌漑に関する研究）で取り組んでいる。
- ② 食物については、上代の技術から現代の技術まで、農業のすべての技術を詳細に紹介している。
- ③ 衛生と健康については、日本の風呂や日本の風土病を研究している。
- ④ エネルギーについては、車を引っ張る動物や電気やガソリン、つまり資源の不足の問題は当時に生じていなかった。
- ⑤ 知識については、「家郷の訓え」、寺子屋や仕事の知識・技術だけでなく昔話の筆記伝承及び口頭伝承について述べている。
- ⑥ しかし、自衛については、ほんの少ししか述べていないが、団体の決意を採る組織・仕組み（例えば村の寄り合い）や若者組みを研究している。
- ⑦ 最後に、社会の絆については、最も宮本が注目したテーマである。宮本は、旅する孤立不羈の作家や僧侶たち（一遍上人、菅江真澄、古川古松軒、イギリス人イザ

ベラ・バード (*Isabella Bird*) ら) に常に関心を持っただけでなく、規模を増加させていく社会のメッシュ型トポロジーも研究した。例えば、家族、村、地域・（封建制度の「国」の新型となる）地方、農作業、家屋の修復（萱葺きの修復など）、若者組みと老人組み、祭りなどの役割は、社会の絆を固めるためと、社会の絆に必要なオトクトニ (*autochtonie*:直訳すると「原地性」: 依属関係と根深い定着 (*enracinement*) の意識と誇り) の気持ちを発達させるための決定的なものである。

宮本常一が描写した田舎の伝統的な村は、自衛を除いて、持続可能な自給自足基地 (BAD) の村に非常に近いものである。コミュニティを防衛する役割は昔、自分の軍隊を持つ大名の役割であった。藩内では、村の組織はかなり余裕があったのである。

ピエロ・サン＝ジョールジオとのもう1つの共通点は、アフリカ（ケニアとタンザニア）への旅の際に起こった意識の変化である。かの地で、宮本は伝統的な生活を観察した。戦争が起こらない限り、貧しく素朴なその生活は、その地での生存を可能にする。その2カ国は正にそういう理由で宮本に選ばれたのである。その当時から、彼は、歴史の流れに従うと思っていた農業の近代化が必ずしも当たり前のことではなく、嘆いていた伝統的農業の衰退が抗し得ないものではないことを多少とも暗黙のうちに理解する。

B) 差異

若い頃の田舎暮らしと自分の研究テーマへの憧れにもかかわらず、宮本常一は研究で忙しすぎたため、生存主義者として生きなかったと言える。生存主義者のような過去や知識があり、戦争の間に生命を脅かされるという経験さえし

たが、然るべき地位の先生として亡くなったのは運がよかったと思う。

「個人の自衛」の問題は、宮本の関心をあまり引きなかった。それは、きっと存命中に唯一経験した攻撃が、第二次世界大戦の際のアメリカ合衆国によるものだけだったからであろう。また、職業軍人制軍隊と徴兵が存在したため当時は、「個人の自衛」という問題意識を持たなかった。後に、日本が復興期や平和の時代を経験し、より良い将来を信じるようになったと思う。

宮本が生きていた頃の日本を考察し比較すると、現在における問題の提起はもちろん違う。しかし、生存主義—とりわけ取り上げた人物たちの生存主義は、あらゆる不測の事態に根本的に備える考え方である。ただし有事が起こらない場合は、ピエロ・サン＝ジオールジオが言うように、自給自足に近づくことでシンプルなものを味わわせてくれる、ありがたい生き方である。

結論

生存主義者たちの場合であっても、宮本常一が描写した伝統的な社会であっても、社会的な絆がないと永続性がないことは、理解し得ることだと思う。

多くの災害を頻繁に受ける国は、復元力(résilience)と社会的な絆をその度ごとに経験する。福島の子力発電所の大災害は、なくなるところか、日本史上で一番大きな挑戦となるであろう。ピエロ・サン＝ジオールジオは、日本には、他の国々より強い社会的な絆があるので、場合によっては、アイスランドやキューバ、現在部分的にそうになっているスイスのような「持続可能な自給自足国(pays-BAD)」になることができるのではという仮説を立てている。ガーデニングや日曜大工、自給自足、「持続性のある発展つまり省エネ

の生き方(le développement durable)」に関する実用的な本の増加に伴い、いたるところで個人的な意識の変化は起こっているが、個人の自衛や共同体の自衛といったものを結びつけるものがない。

失われた地元のノーハウと組織を再発見するために、日本国民が宮本常一の作品を再発見し、学ぶ必要性がかつてないほど高まっているが、現代のまなざしをもたらしてくれるのは、(ここで紹介した人々を始め)西洋の生存主義者たちの著書かと思う。この翻訳・出版は死活問題となり、その無知を正当化できない。その著書のみがはつきりと総合的に原因、効果、解決の提案を紹介するものなのである。だから、今は行動を始めるには遅すぎない。

註

¹ おくやま たかと：「現代社会と＜生存主義＞哲学」、早稲田大学名誉教授・哲学者佐藤慶二との対談、『生存主義宣言』、1975年、p. 284-300。

² Howard Ruff, *Famine et survie en Amérique*.

³ ウィキペディアのフランス語版の「Survivalisme」項目。

⁴ ヴォル・ウエストの説。

⁵ *Survivre à l'effondrement économique*, La Fenderie, éd. Le retour aux sources, 2011年10月、444 p.

⁶ その連続講演は、一般向けの講演会で生存主義者以外の人々にも人気となり、その回を重ね社会運動の一環をなしている。その講演者たちは、メディアが無視する作家やライター、反政治派や国家主義者、エコロジスト、革命派社会学者などである。その運動の象徴は、ラジオ「Ici et maintenant (ここと今)」である。メディアに故意に無視されているのにもかかわらず、その講演者のうち数人は、人気のある有名人さえた。例えば、エティエヌ・シュアール(Etienne Chouard：共和制の歴史、憲法学、通貨論)、ベルナル・リュガン(Bernard Lugan：アフリカ研究)、マリオン・スイゴ(Marion Sigaux：17・18世紀の歴史)、ジャン＝クロード・ミシェア(Jean-Claude Michéa：アナキズムの哲学者)、ピエール・イラル(Pierre Hillard：政治学)、またはエメリク・シヨブラド(Aymeric Chauprade：地政学)等。オピニオン・リーダーであるアラン・ソラル(Alain Soral：ネットワークの社会学・フランス愛国主義の宣揚・様々なコミュニティー主義の批判など)は言うまでもない。

⁷ *Rues barbares – Survivre en ville*, La Fenderie, éd. Le retour aux sources, 2012年12月、416 p.

⁸ 善根宿とは、遍路や修行僧など渡り者のための一種の無料の宿泊宿である。

⁹ それを『忘れられた日本人』で描写している。

¹⁰ Michel Drac & 他の概念、『G5G : Déclaration de

guerre』, éd. Le Retour aux Sources, octobre 2010 年 10 月。

参考文献

フランス語：

BAUDELET Laurence, BASSET Frédérique & LE ROY Alice : Jardins partagés : Utopie, écologie, conseils pratiques, Mens, Terre vivante éditions, mai 2008, 157 p. ;

DiD ArT : Survivalisme : Réflexions personnelles, format Kindle, mai 2012, 178 p. ;

SAN GIORGIO Piero : Survivre à l'effondrement économique, La Fenderie, éd. Le retour aux sources, octobre 2011, 422 p. ;

SAN GIORGIO Piero & WEST Vol : Rues barbares : Survivre en ville, La Fenderie, éd. Le retour aux sources, décembre 2012, 416 p..

SEGUIN Bernard, Coup de chaud sur l'agriculture, collection Changer d'ère, Paris, Delachaux et Niestlé, janvier 2010 ;

STRAWBRIDGE, Dick & James : Vivre (comme) à la campagne, Paris, Larousse, mars 2011 ; Manuel pour tout faire soi-même, collection La Maison rustique, Paris, Flammarion, avril 2010.

Et l'on se reportera avec profit à la bibliographie établie par Piero San Giorgio accessible sur son site
<http://www.piero.com/piero.www/documents/9cbc0b75b461192158d3099d5e92844a.pdf>

日本語：

奥山孝門・佐藤慶二 (1975) 『生存主義宣言』、生存主義協会

「実在主義」 「China Wikipedia」,

<http://jp.wiki86.com/view/910.htm>

『ソトコト』 No.2 (février 2012) 「手作り特集 あたらしい自給自足」、Kirakusha 木楽社.

バレット, ブレンダン (BARRET Brendan) (著)、石原明子 (翻訳) 「生存主義の復興」、

<http://ourworld.unu.edu/jp/survivalism-back-in-vogue/>

ウェブサイト

フランス語：

<http://www.davidmanise.com/> : le blog de l'instructeur canadien David Manise ;

<http://lesurvivaliste.blogspot.jp/> : le blog de Vol West. Malgré les fautes de français, c'est la meilleure référence francophone dans le fond ;

<http://piero.com/> : le site officiel de Piero San Giorgio ;

英語：

<http://www.survivalblog.com/> : 英語圏でのリファレンス